社会科「社会科で学んだことをもとに，意欲的な発表ができる生徒の育成」

上谷　知未
社会科　寺田　康彦
坂井　宏行
石田　了子

はじめに

平成 21 年度の「習得・活用を意図した授業のあり方」に関わる研究を通して明らかになった社会科の課題は，「レポートの発表などで多くの生徒が発表原稿をそのまま読んでしまい，自分の言葉で分かりやすく伝えることができていない」ということであった。また，平成 22 年度の本校の研究主題が，「新学習指導要領の実施に向けて（２年次）－言語に関する能力の育成を意図した取り組み－」と設定され，この主題のもと「説明する」ことが各教科共通の研究内容となった。そこで，社会科における課題と本校の研究主題を考えあわせ，「生徒の意欲的な調査・発表につなげるための教材研究の実践」を当初の社会科の研究主題に設定した。生徒が興味・関心を強く持つ教材を教師が提示すれば，調査や発表への意欲が自ずと高まり，生徒が考えたり，説明したりする力が身に付くと考えたからである。

しかし，昨年 11 月に行われた中間意見交換会において，３年間で育成したい生徒像を明確にすることの大切さに改めて気付かされた。また，平成 21 年度の研究を通して明らかになったもう一つの課題である「生徒一人ひとりが調べたことを他の生徒とうまく共有できていない（社会科で学んだことをもとに調べて発表することや，社会科で学んだことをもとに他の生徒の発表を聞くということができていない）」ということを振り返ったとき，研究主題を設定し直すべきではないかとの考えに至った。そのため，最終的な社会科の研究主題を，３年間で目指す生徒像である「社会科で学んだことをもとに，意欲的な発表ができる生徒の育成」と設定し直した。

１．社会科における「言語に関する能力」および「説明」について

（１）21 年度の研究の振り返り　－習得・活用を意図した授業のあり方－

21 年度にまず取り組んだことは，地理的分野の限られた単元で，生徒に身に付けさせたい知識・概念を明確にしたことである。第１学年では「日本のすがたと様々な地域」，「身近な地域の調査」，「中部地方」について，第２学年では「世界各地の人々の生活と環境」，「世界の諸地域」の各単元を取り上げた。このうちの「中部地方」と「世界の諸地域」は新学習指導要領によって新たに加えられた単元である。

次に，授業で習得した知識・概念を活用するために，レポートを作成して，発表する時間を設定した。その際，新学習指導要領解説を参考にして，習得した知識・概念を定着させるための「テーマ例」を教師が提示することにした。例えば，１年生では「北陸新幹線を建設するメリットやデメリットは何か」，２年生では「北アフリカで高速道路の建設計画があるのはなぜか」などである。

また，知識・概念を定着させるために必要な助言内容を明確にした。例えば，上記のようなレポートに関しては，「具体的にどこに建設するのか」「地図上に地形のようすを示して表現しているか」「先進的な地域との結びつき，もの・人・お金の流れについて調査して記述しているか」などの助言を用意した。

このような取り組みを行ったことで，生徒がニュースなどで得た上辺だけの知識でレポートを書くことが減り，授業で習得した知識・概念を活かすようになってきた。また，自分の意見を発表する場合には，授業のノートや授業プリントを見返す習慣が身に付いてきた。しかし，次のことが課題として残った。

・生徒は発表原稿をそのまま読んでしまい、自分の言葉で分かりやすく伝えることができていない。

・生徒一人ひとりが調べた内容を他の生徒とうまく共有できていない。

（2）「言語に関する能力」と「その指導」について現状の分析

社会科の授業では，どの学年でも自分の意見や考えを発表したいと思っている生徒は多い。しかし，21年度における研究の課題でも述べたが，レポート発表のように調査内容が多いものに関しては，多くの生徒が発表原稿をそのまま読んでしまい，相手に調査内容がうまく伝わっていない。表現の能力からみても，プレゼンテーションソフトで作成した画面を見ながら自分の言葉で分かりやすく説明する能力が身に付いている生徒は少なかった。聞き手となる生徒については、どのような視点で発表内容を聞き取ったらよいのかがよく分かっていないため，学習内容を深め合うことにつながるような質問をする生徒も少ない。

このように，生徒一人ひとりが調べたことを他の生徒とうまく共有できていないのが現状である。言い換えると，学び合うことで新たな知識・概念を身に付けたり，自分の考えを深めたりすることがうまくできていないということになる。例えば，レポートの発表場面で，生徒Aが調査して発表したことを生徒Bは調査していないとする。生徒Aの発表を聞くことで生徒Bは新たな知識・概念を身に付けなければならないが，それができていない。その原因として，「社会科で学んだ知識や概念あるいは見方や考え方をもとに調べて，発表することができていないこと」，それと同じように「社会科で学んだ見方や考え方をもとに他の生徒の発表を聞くことが身に付いていないこと」があげられる。もう一つの原因は，「言語に関する能力のうち，分かりやすく説明する能力が十分身に付いていないこと」である。特に、説明することに関しては，これまで生徒個人の能力に任せていたところが多く，うまく説明できていない生徒に対して意図的な指導を行ってこなかったのが現状である。

（3）22年度の研究の方向性　－言語に関する能力の育成を意図した取り組み－

新学習指導要領解説（p. 7）には「中学校社会科では，社会科各分野の共通の目標の実現を目指し，社会的な見方や考え方を養うことをより一層重視する観点に立って，社会的事象の意味，意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明するなどの，言語活動にかかわる学習を一層充実することとした。」とある。この部分を重視し，本校の研究内容になっている「説明する能力」を育成するための指導のあり方」について考えていくことにした。その際，生徒が社会科の授業で習得した知識・概念（社会科における既習事項）を活用して思考・判断・表現していけるようにすることを大切にした。この「社会科で習得した知識・概念」を用いて表現することが，「社会科における言語に関する能力」そのものであると考えるからである。

具体的な取り組みの一つ目は，授業において生徒が自分の考えや意見を発表する機会を意図的に増やし，説明することに慣れさせることである。そのために自分の考えや意見をしっかり持たせたうえで，４～６人程度の小グループで話し合いをさせることに力を入れていくことにした。

二つ目に，分かりやすく説明するために，自分の考えを文章や口頭で説明するときには，「まず結論を述べ、その後に根拠や理由となることを示すこと」を基本的な説明の型とした。根拠や理由には事実（社会的事象）が必要となる。もちろん説明を聞く生徒にも，その型を通して内容を理解させていく。そうすることで聞き手の生徒が新たな知識や概念を得やすくなると考えた。また，説明においては，「どの立場や視点から説明するのか」「何と比べたのか」「何を関連づけたのか」をはっきりさせることで，多面的・多角的な思考・判断ができるようにした。最終的には，公民的分野で示されている「対立と合意」や「効率と公正」という視点で思考・判断させながら説明させていくことになる。さらに，１年生のうちは短い文章

で説明させ，学年が上がるにつれ長い文章で説明できるようにしていくよう配慮することも考えた。３年生では，論述や討論などの言語活動に取り組ませることになる。

三つ目は，生徒が「社会科ってこんなにおもしろいものなんだ」と強く感じる教材を教師が探し出し，生徒に提示していくことである。生徒が「社会科がおもしろい」と強く感じることができれば，「もっと調べたい」「調べたことを他のみんなに伝えたい」という気持ちが強くなり，「自分の言葉でわかりやすく伝える」ことにつながっていくと考えるからである。例えば、いくつかの社会的事象を比べたり，関連付けたりすることで，今まで気付くこともなかった特色や考えが明らかになることに生徒はおもしろさを感じていくと考える。

（４）中間研究意見交換会における意見より

平成22年11月に本校で開催された，中間研究意見交換会の教科別意見交換会では，今年度の社会科における取り組みについて，特に「言語に関する能力を育成するためにはどのような取り組みが必要であるか」について，次のような意見や助言をいただいた。

指定討論者の高尾台中学校の小山均教諭からは，言語に関する能力を育成するために必要な「課題設定」，「モデルの提示」，「目標到達までの段階的な支援」という３点について，金沢錦丘中学校の西野哲之教諭からは，発表が棒読みにならないようにするために「教師が学習課題を設定すること」，「キーワードのみ示して発表させること」の２点について、それぞれ助言があった。

金沢市教育委員会学校指導課の貞廣賢了指導主事からは，「３年間でどのような力を身に付けさせたいのかを考えること」「そのために，年間指導計画において問題解決型の学習や話合いによる学習活動を，どの単元に位置づけていくのかを明確にすること」「指導と評価の一体化を図るための年間指導計画でなければならないこと」について指摘をいただいた。

金沢大学学校教育学類の諸岡康哉教授からは，授業において「生徒自身の言葉で説明する力」をつけるために，①「話す（Speak to）」ではなく「語る（Talk with）」を目指すこと，②説明する「必然性」を創り上げること，③説明する「対象者」を明確にすること，④時間や文字数を「制限」して原稿を書かせて発表すること，⑤「聞く側」のトレーニング方法，の５点について助言をいただいた。

２．「説明」を意図した授業の実践

研究の方針及び中間意見交換会の助言にしたがって，「生徒の発表（説明）の仕方に関する支援」と「生徒の意欲的な調査・発表につながる教材研究」について並行して実践してきた。「**ゴシック体**」は，中間意見交換会での助言を参考にして実践したものである。

（１）「生徒の発表（説明）の仕方に関する支援」の実践について

①箇条書きのメモ書きから，話し言葉に変換して発表するようアドバイスする。

→「キーワード」のみを聞く側に示して，発表するようアドバイスする。

②わかりやすい発表・説明を意識する時間を設定する。

→「年間指導計画」において「言語に関する能力の育成を意図した取り組み」の欄を設定し，説明する場面や話合いの場面を，どの単元に置くかを明確にしていく。基本的な説明の型を意識した説明をさせる。

③「社会科で習得した知識・概念」を用いて発表（説明）するよう助言する。

1年生

①の実践　地理的分野

第1章　世界と日本の地域構成

「いろいろな視点から都道府県を調べよう」で，資料（都道府県人口順位の移り変わり）を用いて，都道府県別人口順位図をつくり，４つの年代を並べてみて分かることを３つ読み取って，箇条書きしたものをグループごとに発表する。

②の実践　歴史的分野・地理的分野

第2章　都道府県の調査　九州地方（福岡県）の調査

「九州地方の産業」で，九州地方の産業の特色をキャッチコピーで表す。キャッチコピーのみ示して，どうしてそのようなキャッチコピーにしたのかについて，根拠と理由を示して説明する。キャッチコピーを作る際，有名なコマーシャルのキャッチコピーをモデルとして紹介する。

第2編　第1章　身近な地域の調査

「調査結果を整理・分析してまとめよう」で身近な地域を紹介するイラストマップを作成する過程で，身近な地域の特色を資料にもとづいてわかりやすく説明する。地形，土地利用，くらしやすさ，地域の変化などについて，小グループでの話し合いを単元を通して行わせる。

③の実践　歴史的分野

第2章　古代国家の歩みと東アジア世界

「奈良時代にできた古代国家は，人々にとってどのような国だったか」を前後の時代と比較して論述させる。その際，結論とそれを裏付ける歴史的事実を分けて説明する。論述する視点として，政治のやり方やしくみ，人々のくらしのようす，海外との交流のようすなどを助言する。

2年生

①の実践　地理的分野

第2編　第3章　世界の国々の調査

「世界一の人口を持つ中国」で，各々がテーマを決めて調べ学習を行い，グループ内で発表を行う。また，その後代表が学級内で発表をする。

②の実践　地理的分野

第2編　第3章　世界の国々の調査

「世界との結びつきを強めるフランス」で，主題図の比較を通してその結果を表現する活動を行い，グループ内で発表する。

③の実践　歴史的分野

第5章　開国と近代日本の歩み

・「江戸幕府の滅亡」で，薩長と幕府それぞれの立場に立って，既習の内容を確認しながらそれぞれがとった動きをまとめ，討論を行う。

・章のまとめとして，欧米の動きと日本の動きの両面から既習内容をもとに説明できるよう指導する。

3年生

①②の実践　公民的分野

第1章　現代社会とわたしたちの生活

「現代社会の課題にまつわる新聞記事レポート」を発表する。

第２章　人間の尊重と日本国憲法

「社会生活におけるルール」を考える。地域にカラオケショップがオープンした場合のルールづくりを例に考え，発表する。

第４章　私たちの暮らしと経済　　第５章　地球社会とわたしたち

第４章，第５章の導入として「貿易ゲーム」を行い，感想を発表する。

③の実践　公民的分野

第３章　現代の民主政治と社会

「自衛隊が武器を持つことは合憲か違憲か？」を考え，発表する。

歴史的分野「日米安全保障条約」「第二次世界大戦（日中戦争・太平洋戦争）」「警察予備隊から自衛隊」，公民的分野「憲法第９条」など，既習したことをもとに，合憲，違憲を判断した理由を説明するよう助言する。

（２）「生徒の意欲的な調査・発表につながる教材研究」の実践について

→生徒に説明する「必然性」が出てくるような課題設定のための教材研究，生徒の目指すべき姿が分かるモデル提示のための教材研究を行う。

以下の単元で「説明する」モデルを提示した。

１年　歴史的分野　第３章　第２編　「室町文化とその広がり（義政と銀閣の最新研究）」について

２年　地理的分野　第３編　第１章　さまざまな面から見た日本「世界と日本の生活と文化」について

３年　公民的分野　第４章・第５章の導入として生徒に提示する「社会的企業」について

３．成果や今後の課題

・「生徒の発表（説明）の仕方に関する支援」の実践について

社会科で習得した知識・概念を用いて分かりやすく説明する力をつけるために，中間意見交換会での助言を生かしながら実践を進めてきた。その結果，生徒は，学習課題について筋道を立てて考えるようになるとともに，分かりやすく説明する力が身に付いてきた。

また，「説明する」という言語活動に意図的・継続的に取り組ませることで思考力・判断力・表現力が高まってきたことも各学年の実践から読み取れた。年間指導計画の作成に関しては，「問題解決型の学習」や「話合いによる学習」をどの単元に位置付けていくのかを，新指導要領の完全実施に向けて明確にしていくことが課題である。

・「生徒の意欲的な調査・発表につながる教材研究」の実践について

教師が十分に研究を行った教材をモデルとして提示すると，生徒の反応や発表への意欲に明らかな変化が現れてきた。生徒が説明することの必然性については、どのような形で示すのかを工夫していく必要があると考える。

３年生の実践

１．研究の方針

新学習指導要領公民的分野の最後には，「（４）私たちと国際社会の諸課題　イよりよい社会を目指して」がある。今年度，３年生では，この単元について研究・実践を行った。

中学校社会科では，（４）イのような活動ができる生徒を，３年間の中学校社会科において育てることを目標としている。この単元は，「社会科の卒論」として，中学校社会科のまとめとして位置づけられており，新学習指導要領では生徒に対してレポートを提出させる方法が例としてあげられている。また，「テーマ」「課題」は，「私たちがよりよい社会を築いていくためにはどうしたらよいのかについて，持続可能な社会を形成するという観点から設けて探求すること」（新指導要領解説 p.143）とある。

まだ中学生である生徒が，中学校社会科で習得したことを振り返りながら，持続可能な社会（→新指導要領解説 p.144）を形成するという観点から，課題を自ら設定することは大変難しいと考える。だからといって中学校社会科のまとめの大項目において，教師が課題を設定してしまうことは，生徒の設定できるかもしれない可能性を摘み取ってしまうことになる。そこで，本時では，この大項目の課題を生徒自ら意欲的に設定できるように，教師がモデルを示すこととした。また，生徒が自ら課題を設定し，設定した課題を解決するための十分な時間を確保するために，教師がモデルを示す授業をこの９月に設定した。

中学校社会科の総仕上げとしてのレポート作成のために，教師が生徒に示すモデルは，「社会科って，こんなにおもしろいんだ」「私も，もっと調べてみたい」「調べたことをみんなに説明したい」というふうに，生徒の心を揺さぶり，生徒に大きな興味・関心を引きつける教材でなくてはならない。

また，教師が，前期終了前後に具体的な作成方法について説明する際には，公民的分野の大項目（４）の解説にもあるように，「現在及び将来の人類がよりよい社会を築いていくために解決すべき課題を考え続けていく態度を育てる」（新指導要領解説 p.138）ことができるような教材を示すことが必要であると考える。

この２つのことを念頭におき，「社会的企業」を生徒に示す教材として研究することとした。生徒が提出するレポートは前にも書いたが，「私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題と，その解決方法を考える」というものである。解決すべき課題として「世界の貧困問題」を，その解決方法として「社会的企業」を生徒にモデルとして示すこととした。「社会的企業」とは「社会的課題を，慈善やボランティアのように善意で行動するだけでなく，ビジネスの手法で解決する集団」のことである。

「世界の貧困問題」への取り組みとしては，寄付金の収集，国民の税金による政府開発援助（ＯＤＡ），ＯＤＡの事業を計画立案する独立行政法人ＪＩＣＡのボランティア活動（青年海外協力隊），そして国連の専門機関による活動などがあげられる。これらは，さまざまな成果をあげてきた。しかし，国民の税金や寄付金に頼った取り組みには景気に左右されるなどの問題点もあり，貧困問題解決にはいたっていない。いろいろ試みてはいるが，解決できない，それではどうしたらよいかという過程を生徒に示した上で，「社会的企業」について示したい。また，このような提示の仕方によって，生徒に「解決すべき課題を考え続けていく態度」を育てることをねらいとした。

生徒は「世界の貧困問題」に関しては，２年生の地理的分野「（１）世界の様々な地域授業　ウ．世界の諸地域　(ｳ)アフリカ」において，貧困の現状に関しての知識は持っている。持っている知識の単なる復習では生徒は退屈してしまうので，その知識が広がるような形で，貧困の現状を示す努力をした。また，公民的分野においては，ＮＧＯ，ＮＰＯ，ＯＤＡ，景気変動，日本の国家予算については学習済みである。これら学習したことを活かしながら，貧困問題の解決方法を示した。

また「課題を探求させるにあたっては，対立と合意，効率と公正などの見方や考え方から検討するようにすることも留意する必要がある」（新指導要領解説 p.144）ことも念頭におきながら，授業において，生徒には常に「将来，発展途上国の人々にとって必要なのは，どのような活動・支援か？」を考えさせることを促し，授業の最後に，効率と公正という観点から，生徒に感想を述べさせることを試みた。感想を述べさせる際，生徒は，ワークシートに書いたことを読みがちであるが，そうではなく，自分の言葉として，相手に伝えることを大切にさせた。

２．実践内容

第３学年　社会科（公民的分野）学習指導案

Ⅰ．単元名　　私たちと国際社会の諸課題　～よりよい社会を目指して～

Ⅱ．目標　　よりよい社会を築いていくために解決すべき課題と，その解決方法について考える。

Ⅲ．単元計画

１時間目　・「私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題と，その解決方法を考える」レポート提出について概要説明する。
　　・「私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題」には，どんな課題があるか出し合う。
　　・解決すべき課題の例として「世界の貧困問題の現状」について復習する。

２時間目　・教師は，「世界の貧困問題をどのように解決するか？」について，レポートのモデルを示す。
　　・生徒は，「発展途上国の人々にとって，本当に必要な活動・支援は何か？」を考える。

３時間目　・「私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題と，その解決方法を考える」レポート発表。　（２月上旬予定）

Ⅳ．２時間目の授業

（１）題目　「発展途上国の人々にとって，本当に必要な活動・支援は何か？」

（２）目標　・レポート作成に向けて，「もっと調べたい」「調べたことを説明したい」という意欲を持つことができる。　【関心・意欲・態度】
　　・発展途上国の人々にとって，本当に必要な活動・支援について考え発表することができる。　【思考・判断】

（３）準備　：　ワークシート，　スライド，　蚊帳

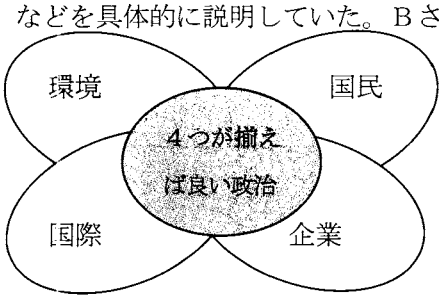
（４）本時の展開

生徒の学習活動	教師の指導・支援・留意点　☆：評価方法	時間
１．導入 「世界の貧困問題を解決するために，これまでにどのような取り組みがあったか」について発表する。 ２．学習課題の提示	・　前時の宿題とする。	10
世界の貧困問題をどのように解決するか？ ～　発展途上国の人々にとって，本当に必要な活動・支援とは？～		

① 生徒が発表した「取り組み」には，どのような問題があるのかを知る。 ・ 政府開発援助について ・ ＪＩＣＡ（青年海外協力隊）について ・ 寄付金について ② ①の問題点をふまえ，他に解決方法はないか考え，発表する。 ③ 「社会的企業」について説明する。 ３．まとめ 「貧困解決のために行われたこれまでの活動と，社会的企業の活動とを比べて感じたこと」「将来にむけて，発展途上国の人々にとって必要なのは，どのような支援か」について，ワークシートにまとめ，発表する。	・ ｽﾗｲﾄﾞで，図，グラフ，写真を中心に示す。 ・ 教師だけで進めることなく，生徒に答えさせながら進める。 ・ 生徒から遠い出来事ととらえることがないように，アキュメン・ファンド，ＡｔｏＺ社，住友化学が商品化した「蚊帳」を生徒に示す。 ☆ 「公正・効率」の観点から説明できているか。 例）「命に関わることなので，生活向上のため，これまでよりスピーディーに効率的に支援すべき。そのため社会的企業は有効である。しかし，社会的企業は個人的に経営するので，国や国連が行うより公正に支援できるのか疑問である。両者が結びついて支援を行っていくことが必要である。」 ・両者が結びついて支援を行うことについては，国連と社会的企業，ＪＩＣＡと社会的企業とが結びつき，すでに活動している。しかし，これは生徒のレポートの課題となりうるので，ここではヒントを出す程度にとどめておくこととする。	40

Ｖ．３時間目の授業において生徒が発表したレポートの内容

Ａさんは解決すべき課題として「たびかさなる首相の辞任と日本の信頼の低下を食い止めるには？」を設定し，幅広く新聞記事や日々のテレビニュースから情報を集めた。現状の説明に関しては，自ら作成したグラフ「最近の内閣総理大臣支持率」を使い，メディアによる政権批判の問題点を指摘し，菅政権が行った良い点をこれまで学習したことを活用して分析を行っていた。その上で，良い政治の定義を自ら作成し，図示した。下記の図である。環境・国民・国際・企業の４つの楕円を描き，４つに関する政策をバランスよく行っていれば，良い政治を行ったといえるという定義である。菅政権は，環境に関しては「環境税」を導入し，国民には「子ども手当」を継続し，国際的な立場の確立として「ＥＰＡ締結」や「横浜ビジョン」を出したこと，企業に対しては産業の空洞化をくいとめるための「法人税減税」を実施したことなどを具体的に説明していた。Ｂさんは「ＴＰＰ参加についての問題点」を分析しながら，ＴＰＰが日本の農業改革のきっかけとなるという方向性で解決方法を探っていた。積極的，意欲的な発表を目指し，希望者のみの発表とした。発表しない生徒は，発表を聞いて「解決方法が現代人と将来の人々のニーズにあっているものであるか」などの視点から意見を述べた。



２年生の実践

１．研究の方針

新学指導要領では，言語活動を通して「社会的事象の意味，意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明するなど」の学習の一層の充実を図ることを要としている。

そこで，２年生の授業において，社会科における思考力・判断力・表現力等を育成するために意識して取り組んだことのひとつは，１年次より行ってきた「習得したことを活用する」という点をさらに徹底・強化したことである。具体的には，始業時５分程度で行う習得クイズでの基本的事項の確認や，授業中の発問に答える際に「習得した事項を，自分の言葉で，なるべく長い文章で説明する」ということである。同時にこれは，昨年度からの課題にもなっている「発表の際に，原稿をまる読みしてしまい自分の言葉で発表できない」という欠点を克服する力を養うことにもつながると考えた。この取り組みを通して，生徒が自分の考えや意見を持ち，それらの考えや意見を自信を持って表現できるように支援したいと考えた。普段の授業の中でこのような力が定着してくると，必然的にレポート発表などの際の意欲的な表現力も身についてくるはずである。

次に意識したことは，言語活動を取り入れる際には，小集団での活動や発表をさせるだけではなく，最初は，課題に対して個人で取り組む姿勢を重視したことである。それは，個人で考え，まとめたことをもとにして，その個人の意見を集団に広げ，ディベート・ディスカッションや発表に活かしていくことも必要だと考えたからである。この場合，個人での考えだけでは気づくことができなかった意見などを他者の意見から知ることができるという利点があるからである。こうすることによって，社会的事象を多角的・多面的に考察するという視点を養えると思ったからである。

そして，大学との共同研究の一環として，社会科が好きな生徒を育成するために，楽しいと思える授業を意識したことである。いかに生徒の興味・関心をひき，疑問を抱き，「もっと調べてみたい」と思えるような教材を提示できるかを心がけた。そのためには，生徒のつぶやきを大切にし，生徒の疑問から課題が設定できるように意識してみた。

最後に，生徒の活動経過や結果を還元し，広めていくことを重視した。できるだけよいところを発見し，紹介していく。このことによって生徒に自己有用感を持たせ，さらなる意欲をわかせることにつながると期待しているからである。

以上の視点をもとに，一人ひとりの興味・関心を大切にしながら各々が主体的に研究課題を見つけ，解決するための方法を習得していく課題学習を進めることとした。

２．実践内容

第２学年 社会科（地理的分野） 学習指導案

Ⅰ．単元名　　世界と日本の生活と文化

Ⅱ．目　標　　世界各地に見られる生活や文化を日本と比較しながら大観し，興味・関心を高める（その手だてとして，調査活動や作業・体験的な活動で習得した知識・技能を，発表や意見交換の場において，自分の言葉でわかりやすく伝える）。

Ⅲ．単元計画

第一次　　各々の興味に基づき，課題を設定する（２時間）

第二次　　自分たちで設定した課題をリサーチし，発表する（５時間 － 本時は第４時間目）

・課題のリサーチと準備，およびまとめと発表準備をする

・課題について発表・意見交換を行う

・世界各地の人々の生活についての情報を共有し，さらなる習得へとつなげる

第三次　日本の伝統的な生活を知る（３時間）

Ⅳ. 本時の授業

（１）題目　「社会どこでもドア　～世界の各地に行ってみよう～」

（２）目標　・気候についての既習学習をもとに，班ごとに設定した課題について調査・発表をすることにより，地域ごとの生活の特長を知り，自分たちが生活している日本の文化との違いに気づく。【思考・判断】

・小グループでの調査・発表活動の中で，既習の知識や技能を見い出し，自分の言葉で説明することができる。【技能・表現】

（３）準備　確認クイズ用パネル，まとめ用紙，説明用紙，メモ用紙，自己評価表，感想用紙

（４）本時の展開　＊生徒指導の３機能に関わる事項

学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点	評価と方法	時間
１．既習内容の確認をし，本時の学習課題を把握する。 (1)気候に関する確認クイズを行う。 (2)解説をする。	・「世界の気候」で習得させたい事項が答えとなるパネルを用意する。 ・多くの生徒に発言させたい。 ・確認クイズの内容を，本時の発表で活用できるように助言する。	・確認クイズを通して，既習の学習内容を想起し，世界の気候について関心が持てたか。 (①④　挙手，発言)	５分
２．　本時の学習課題を確認する。			２分
『社会どこでもドア　～世界の各地に行ってみよう～』というテーマで紹介し合おう			
・班ごとに自分の担当を確認する。	＊班員全員での最終確認を促す。 【共感的人間関係】		
３．班ごとのテーマについて，既習事項をもとに発表を行う (1)発表（各班３分） ・熱帯（８・１０班） ・乾燥帯（２・９班） ・温帯（１・７班） ・冷帯（５・６班） ・寒帯（３・４班） (2)質疑応答・意見交換	・レポートの棒読みではなく，既習の知識や技能・リサーチしたことを根拠に，様々な視点から皆にわかりやすいように説明するよう助言する。 ・必要に応じて，教師が各班の説明の要点を黒板に表す。 ＊各々の班の説明を聞き，自分の考えをさらに深めさせたい。 【共感的人間関係】	＊各々がわかりやすく説明できたか。 (③ 観察，ﾜｰｸｼｰﾄ) 【自己決定】 ・相手側の意見を聞き，疑問点などをメモにとりながらしっかりと聞くことができたか。(③ 観察)	30分 ５分
４．授業の振り返りを行う。 （自己評価表・感想用紙に記入する）	・自分たちが調査した課題だけではなく，全体の発表から学んだ概念をもとに，到達目標の達成度を自己評価表に記入させる。	・発表・意見交換で得た概念を用いて自分の考えを文章で記述しているか。 (② 自己評価表)	５分

5．意見・感想を発表する。	・授業の感想をもとに，できるだけ多くの生徒に発表させたい。	・発表を通して，世界各地の伝統的な生活が気候に影響を受けていることに気づき，その生活に興味を持つことができたか。 (① 自己評価表，発表)	3分

（5）本時の問題点

生徒一人ひとりが世界各地の生活や文化に興味・関心を持ち，その特長が気候によって影響されていることを知るきっかけとなったか。

3．実践した授業やその後の取り組みについての考察

自分たちで課題を設定し調査させたことで，各々の興味・関心に基づいたテーマを設定することにつながり，意欲を持って調査・発表活動に取り組むことができた。それゆえに，予想以上に幅広い視野からのテーマが設定できたように思う。しかし，いざ発表の段階になると，まだまだ発表原稿を読むことに終始する生徒も少なからずみられ，言語活動の指導の難しさを痛感した。

そこで，教科別意見交換会で指定討論者からいただいた意見をもとに，普段の授業から「その場で課題を設定し，意見を言わせる」ということや，「単語・キーワードのみを提示して，そこから自分の言葉で説明させる」ということを意識してみた。また，まず「生徒にこうなってほしい」という形を示しながら発表活動を行うということにも力点を置いてみた。その結果，徐々にではあるが，生徒たちは自分の言葉で長く説明するようになってきている。

ただ，今後の課題として，毎時間にわたって問題解決学習を扱うのは難しいので，年間指導計画をしっかりと練り直し，「どんな子どもたちを育てたいのか」を明確にしたうえで，扱う単元を決定していかなければならない。そして，その場合，個人での考察・発表はもちろん，話し合い・討論活動によって深まることもあるので，「個」と「集団」の活動を随時取り入れていくことを心がけた。また，教師と生徒が語り合う場を大切にすることや，聞く側の態度を育てていくことも重要であるので，今後意識していきたい。

その他の実践として，単元テストで「生徒自身が1問1答の問題をつくり，正答も書く」という出題をすることによって，生徒の表現力をみるような取り組みも行ってきた。この成果としては，しっかりと趣旨をふまえ，根拠を示して問題を作成する生徒が増えてきたことからも，普段の授業の発表が活かされた形となったのではないかと思う。

最後に，1年間を終えての事後調査の結果，「自分の考えを文章にする力」や「資料を読み取る力」などがついたという意見や，「自分の意見をもてるようになった」という意見が多く見られ，表現力育成の一助にはなったのではないかと思っている。ただし，「社会科は好きだがあまり得意ではない」という生徒や，地理的分野よりも歴史的分野の方が好きだという生徒が非常に多く，まだまだ表現活動の不足を感じるのも事実である。しかし，ほとんどの生徒は3年生の公民的分野の勉強にかける意気込みが高く，この意欲を活かしてよりよい表現活動を展開できるようにさらなる工夫をしていかなければならないと考える。

以上のような指導改善はもとより，来年度は「日常評価」にも工夫を施し，単元を通して身につけさせたい力をあらかじめ提示し，評価規準をもとに評価した結果を生徒に還元していくことが大切である。

1年生の実践

1．研究の方針

1年生では，新学習指導要領の趣旨をふまえ，次のことを授業の基本的なスタンスとしてきた。一つめは，「その時間に習ったことを使うこと」を生徒に意識させることである。習ったことを使うことで基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることができる。また，習ったことを使うことができれば，何とか自分の考えや意見を持てるようになり，生徒はわかる喜びを感じることができると考える。二つめは，社会科を好きになってもらうために，生徒に考えることの楽しさを味わわせることである。そこで，授業を「生徒が自分の考えを組み立てるための情報を得る場」として位置付けた。三つめは，学習意欲を高めるために，「学習課題に取り組んだ過程や結果を肯定的に評価すること」である。具体的には，表現活動において生徒のよさをほめていくことになる。

以上のことから授業の基本的なスタイルは，「その時間に習ったことを使って学習課題のまとめを短い文章で表現させるもの」となっている。生徒にとって分かりやすいように，授業をできるだけ50分で完結させるようにしている。教科書の見開きまたは4ページ分の内容である。そのため学習課題は授業の導入において教師が示すことにしている。学習課題のまとめ方については，学習プリントの最後にあらかじめ設問として記載しておく。つまり授業の出口を先に見せておく格好になる。学習課題のまとめを言語活動からとらえると「書くことによる説明」の形が中心となり，書いた内容を「口頭で発表する」ものとなっている。1年生では，「短い文章で書いて説明する」という言語に関する能力を育成することに長期的に取り組み，その積み重ねによって思考力・判断力・表現力を育成したいと考えた。また，そのことが「要約」「論述」「討議」といった言語活動の基礎になると考えた。

50分の授業の具体的な流れは以下の通りである。

①課題把握　・学習課題の追究に必要となる基本的な用語をプリントへ記入する。この時間をワーク点検に充てる場合もある。この間に題材名や学習課題を黒板に書く。
　　・生徒は，教師が提示する学習課題（本時の目標）を知る。

②課題追究　・生徒は，課題の追究に必要な情報を教師の説明や資料などから得て，学習課題について自分の考えを組み立てていく。この時点での板書事項は必要最小限にとどめ教師は生徒との対話に集中する。生徒はプリントへの書き込みも行う。

③課題解決　・生徒は，学習課題に対する自分の考えを 100字程度の文章でまとめる。教師は，生徒が作文を書いている間に板書を終わらせ，机間巡視を行う。

④整　　理　・作文を書き終えた生徒から，板書事項をノートに写し，授業内容を振り返る。

⑤発　　表　・時間にゆとりがあれば，評価規準を満たしている生徒に発表してもらい，解答例として示す。学習プリントは教師による添削後に返却し，ノートに貼らせる。

生徒の思考力・判断力・表現力を育成するための具体的な手だてとしては，次の三つのことを考えた。

一つめは，50分の授業で身に付けさせたい「観点別学力」を生徒に示すことで，授業で「何が大切なのか」「どこで何を学ぶのか」を明確にすることである。4観点のうちの観点②・③の場面がどこなのかを授業中に伝える。生徒の集中力を高めるためにも重要視している。二つめは，説明させるときに，結論や立場，根拠，理由を分けて述べさせることである。その際，結論あるいは立場を先に決めてしまうと筋道を立てて考えやすくなると考える。三つめに，小グループでの話し合いで，生徒一人ひとりが必ず発表する機会をもてるよう輪番制をとっている。1グループを4人で構成し，司会・発表・記録・補助を交代する。

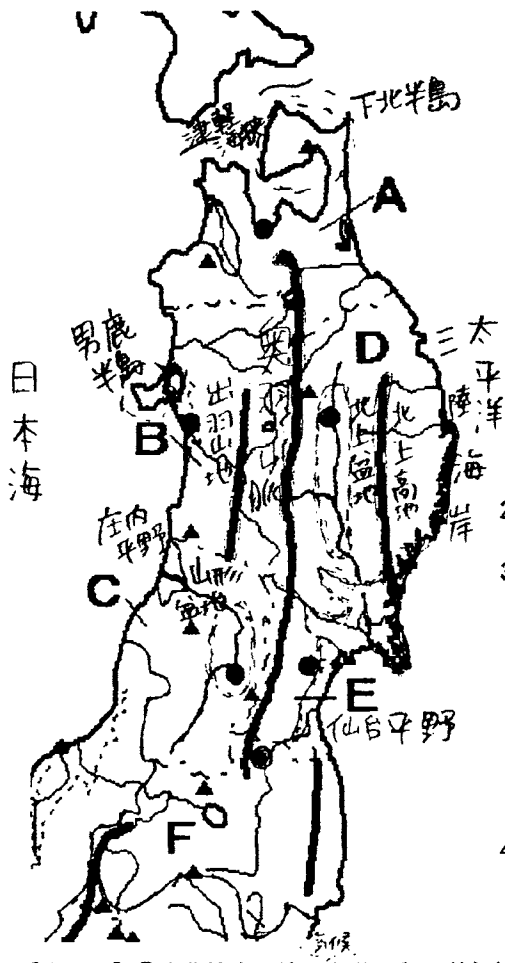
日常的な学習活動の評価については，「学習プリント」の記述内容を主たる評価対象物としている。学習

プリントの最後にある「学習課題のまとめ（作文）」を，次の記号を用いて４段階で評価する。◎十分満足できる，○概ね満足できる，△不十分なところがある，×努力を要する　△～×については，どうすれば○に近づけるかについて助言を書き込んで生徒に返却する。この記号を名簿に記録していき，観点②や③を評価するための資料とする。

２．実践内容

（１）学習プリントの例・・調べたことを活用して，東北地方の地理的な特色を文章で表現させるもの。

地理学習プリント
東北地方（岩手県）の調査
東北地方をながめてみよう（教）ｐ６６～７３　（地）１０５～１０７
【学習課題】東北地方の位置や自然の特色について理解しよう。③・④
【調べよう】
【地図１】東北地方



1　地図中のＡ～Ｆの県名と県庁所在地名を書きなさい。●印が県庁所在地です。

A　（ 青森県 ）（ 青森市 ）
B　（ 秋田県 ）（ 秋田市 ）
C　（ 山形県 ）（ 山形市 ）
D　（ 岩手県 ）（ 盛岡市 ）
E　（ 宮城県 ）（ 仙台市 ）
F　（ 福島県 ）（ 福島市 ）

2　東北地方と他の地方の境目に赤線を引きなさい。
……県境　……平野

3　次の地形の名称を地図中に書き込みなさい。

①日本海　太平洋　津軽海峡　三陸海岸
②津軽平野　庄内平野　仙台平野
③北上盆地　山形盆地
④出羽山地　奥羽山脈　北上高地
⑤最上川　北上川
⑥下北半島　男鹿半島

4．８月の平均気温
①青森市　（ 23 度）
②秋田市　（ 24.5 度）
③仙台市　（ 24.1 度）
金沢市 26.6℃

【まとめ】①東北地方の地形を見ると、どんな産業がさかんだと予想されますか。

川が多く平野もあるので稲作，また、三陸海岸での漁業がさかんだと思う。

【まとめ】②東北地方の６県のまとまり（結びつき方）は関東地方に比べて強いか弱いか、どちらだと考えますか。その理由も書きなさい。

弱い。理由は山地が多く、県と県とを分けているため。また、南北に長いので北端と南端の関わりは少ないと思うから。

【まとめ】②の評価規準Ｂ（○印）結論：弱い／理由：南北に長く（面積が広く），山地が多い

（2）生徒の学習の振り返り（アンケート）

発表や自分の考えを短文でまとめることはもちろん力になったし、班やグループ活動が9月にあったので、仲間との色々な意見の出しあいの時に、積極的に意見を言える力がついたと思う。発表までの意見をまとめるのも上手くできるようになったと思う。

何を述べたいのか、この資料から何が分かったのかをはっきりいうようにしてきました。実際、はじめに結論を言うようになったので分かりやすく説明する力がついたと思います。また、授業で短い文章でまとめることで、何が要点なのかを見抜けるようになったと感じます。

3．実践した授業やその後の取り組みについての考察

100字程度の表現活動に慣れるまでには時間かかったが，ほとんどの生徒が，表現活動を苦にしなくなってきた。慣れるまでとは，生徒の言葉を使うと「要点やキーワードを入れて短くまとめる」あるいは「わかりやすく説明する」ということになる。

「書くことによる説明」を積み重ねたことにより，生徒は，学習課題のまとめを「結論や立場，根拠，理由に分けて考える」ことができるようになってきている。まとめの作文の添削結果や生徒による1年間の学習の振り返り（アンケート）を見ると，生徒によって違いはあるが，「比べて考える，つながりを考える，いろいろな角度から考える，原因を考える」などの思考力が身に付いてきたことが読み取れた。

思考力・判断力・表現力の育成をねらってきたが，「資料を読み取る力がついた」，「資料をもとに考えたりする力がついた」と実感している生徒も意外に多いことが分かった。地理的分野「内容（2）ウの日本の諸地域」の学習で，「書くことによる説明」を長期的に実施したことによるものなのか，どのクラスでも生徒は2対1の割合で，地理的分野の学習内容に関心をもったことがアンケート結果から分かり，年度初めのアンケート調査と比べると結果が逆転した。

以上のように，「短い文章で書いて説明する」という言語活動を長期的に行わせることで，生徒の思考力・判断力・表現力を高めることできたと考える。その際，授業で習った知識・概念・技能を活用することができる「課題のまとめ方」をいかに工夫するかが大きな課題となる。言い換えると，生徒が「書いて説明した内容」に何が記述されていれば（どんな知識・概念あるいは新しい見方や考え方が記述されていれば）概ね満足できる状況なのかを，あらかじめ明確にしておく必要があるということになる。

今年度，1年生では，「書いて説明する」ことを中心にした言語に関する能力の育成およびそのことによる思考力・判断力・表現力の育成に取り組んできた。「口頭で発表する」ことについては，自分の考えをもって話し合いにのぞめるため，自信をもって発表できる生徒が増えた。今後は，「論述」・「討論」といった言語活動に取り組む前の段階として，他の生徒の発表を聞いて「要約」する言語活動に取り組み，学び合いを深めながら，多面的・多角的に考える力を身に付けさせていきたい。